The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス語肯定文のイントネーションについて : 名詞句に焦点をあてて
Author(s)	阿南, 婦美代
Citation	Gallia. 1979, 18, p. 7-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス語肯定文のイントネーションについて
— 名詞句に焦点をあてて —

阿　南　婦美代

1．はじめに

最近のフランス語学習法では，リズム，イントネーション面の修得の重要性が認められ，新しい méthodes [1]では種々の配慮がなされている。われわれの研究の目的は，日本人が，フランス語を話す時に存在するであろう，イントネーションの干渉現象を明らかにし，その成果を積極的に教授法に取り入れることである。われわれは先に，フランス語上昇調疑問文において日本人話者にみられたイントネーション干渉現象についての研究を試み，いくつかの問題点を指摘した。[2] 今回の研究は　日本人がフランス語肯定文を話す際にみられるイントネーションの干渉現象をしらべる仕事の準備段階として，フランス語肯定文の中で，特に拡張 (expansion) を含む名詞句とイントネーション（以下イントと略）の働きを，フランス人話者においてしらべてみたので報告したい。

2．文章作成

文章作成は次のように行った。骨組最小構文は SN + SV である。名詞句の拡張要素については Salkoff [3] を参照し，フランス語により多い名詞の右側への拡張を行った。名詞句の図式化は下記のようである。

Dét + Nom + ϕ
Dét + Nom + Adj
Dét + Nom + Quant + Adj
Dét + Nom + Quant + Adj + PN
Dét + Nom + Quant + Adj + PN + Prop.　relative

Adj :　Adjectif

Quant :　Quantificateur

PN :　Préposition + Nom

Prop. relative :　proposition　relative

更に，この拡張を含む名詞句が，文章の中でどの位置にくるかによって，次の3つのシリーズを作成した。

-Série Ⅰ： 名詞句が主語の位置に来る時，

-Série Ⅱ： 名詞句が目的語の位置に来る時，

-Série Ⅲ： 主語と目的語の両方の位置に来る時。

作成した文章の例を各シリーズ1例づつあげると次の通りである。この各1例をこの仕事では分析する事とする。第Ⅲシリーズの最後の2つの拡張要素 (PN, Proposition relative) を含む文章は，長すぎる由，録音に際して話手に困難が見られたので，はぶかざるを得なかった。

Série I (SN_1 avec expansion + SV)

11. Ce nombre est insuffisant.
12. Ce nombre réduit est insuffisant.
13. Ce nombre assez réduit est insuffisant.
14. Ce nombre assez réduit de postes est insuffisant.
15. Le nombre assez réduit de postes qu'il propose est insuffisant.

Série II (SN_{pronom} + SV + SN_2)

21. Vous dégustez ce plat.
22. Vous dégustez ce plat typique.
23. Vous dégustez ce plat assez typique.
24. Vous dégustez ce plat assez typique de la région.
25. Vous dégustez le plat assez typique de la région qu'elle propose.

Série III. (SN_1 avec expansion + SV + SN_2 avec expansion)

26. Cette machine est vendue dans ce magasin.
27. Cette machine moderne est vendue dans un magasin renommé.
28. Cette machine très moderne est vendue dans un magasin très renommé.

3．録音

話手には，パリに住み，パリ地方のフランス語を話す30～40才の知識階級のフランス人4人 (A, B＝女性, C, D＝男性) をえらんだ。職業に関連するイント・パターンの存在をさけるため，職業はあえて均一にはしなかった。内訳はA：フランス語教師，B：新聞社文書係，C：医学生，D：人口統計学専門家である。録音はパリ大学音声研究所の録音室で行った。[4] 録音用テキストは，すべての文章をまぜ合わせ，順不同にした。これは話手に

よる同シリーズに属する文章間の比較や，新しい拡張要素へのアクセントなどをさけるためである。話手には，録音前にテキストを与え，充分慣れさせた上，次の指示を与えた。

—感情表現なしの陳述調である事

—最も自然な発話である事

—読み続け，くりかえし調をさけるため，文章間には充分間をおく事

—読みでなく，話し言葉の速さを保つ事

—本人が納得のいく迄云い直しが可能な事。

4．音響分析とパターン作成方法

録音されたテープは上記研究所で音響分析が行われた。即ち，mingographe によって，メロデイ検出機 (le détecteur de mélodie) と強度計 (intensimètre) から出る情報，即ち音波(a)，音の強さ(b)，基本周波数(c)の三者が記録される。(Fig 4–1 参照) 我々の分析は，イントに最もかかわりのあるとみなされる基本周波数について行うが，その計測には次の方法を用いた。

—アクセントのない短い音節については，母音の中央の値

—長く発音された音節で基本周波数に変化がみられる場合は２つないし３つの値

—文章最後の音節で高さの変化が見られる際は一番低い値。

ところで，我々の目的は，何人かの話者に見られた共通点をひき出す事にある。何人かの声の比較を可能にするためには，ある基準をもとに標準化を行わなくてはならない。各人に声の高さの差がある以上，基本周波数の絶対値で比較する事は出来ない。種々の方法を試みた結果，JC LAFON[5]の提案に従い，次の方法を用いた。各話者の各文章につき，すべての音節の基本周波数を加えたものを音節の数で割り，平均値を出す。我々はそれを平均基本周波数 (Fondamental moyen = Fm) とよぶ。この平均基本周波数を基準にして，各音節の高さの関係をみていくのであるが，隣接した音の間の高さの差は音階差 (gamme musicale) で表わす事にする[6]。Rossi の聴覚テストの結果によれば[7]，アクセントやイントにおいての弁別閾 (seuil différentiel) は5.64％であるが，音階の$^1/_2$音差は5.9％であるので，我々の分析結果は$^1/_2$音を単位として表現する事とした。尚，mingographe の上では 1 mm = $^1/_4$音であり，我々の図式でも 1 mm = $^1/_4$音である。

次にパターン作成の一例を文章 “Vous dégustez ce plat assez typique” —話者D (Figure 4–1) で示す事にする。この文章の Fm は計算により，126.03Hz になり，音階で表わすと mi_1 = 82.4 Hz から15quart de ton 上である。各音節の Fm からの音階差を取って図式化すると，Fig. 4–2 のようになる。これを個人図式と呼ぶ。次に４人の個人図式を Fm をもとにして重ね合わせる (Fig. 4–3)。更に４人の平均値を計算し，平均値図式を作成した (Fig. 4–4)。この図式は，４人の話者の共通点を更に明らかにし，後に日本人の発話と比較する際，有益と考える。

(Figure 4−1)

Ph. 23 : Vous dégustez ce plat assez typique. (Figure 4-1)

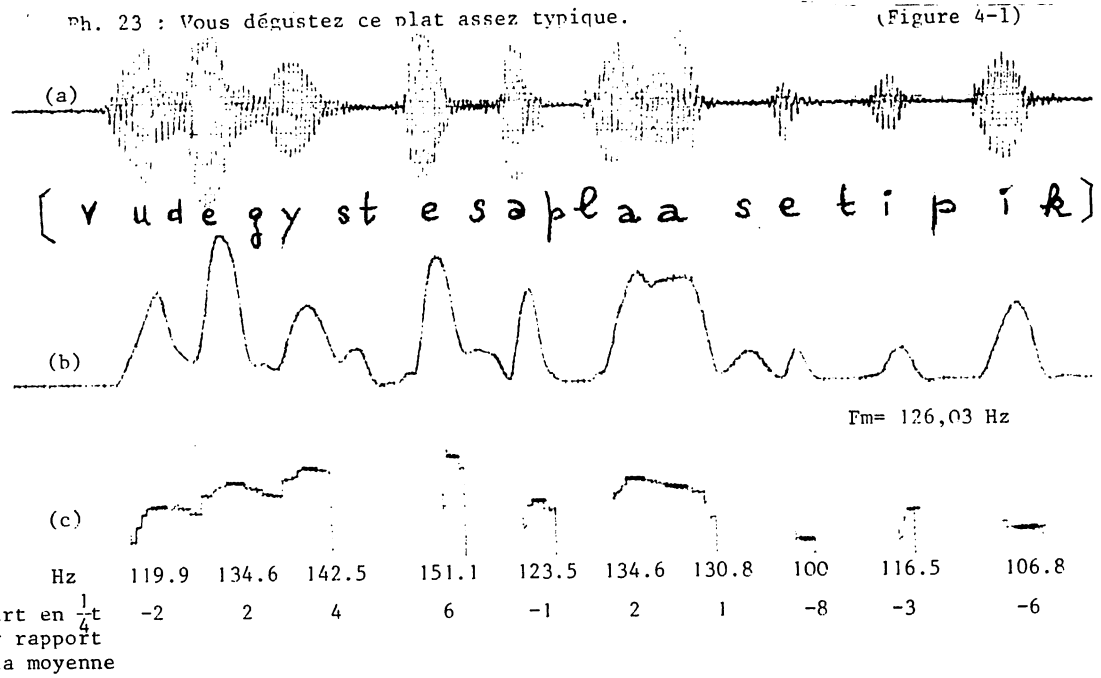
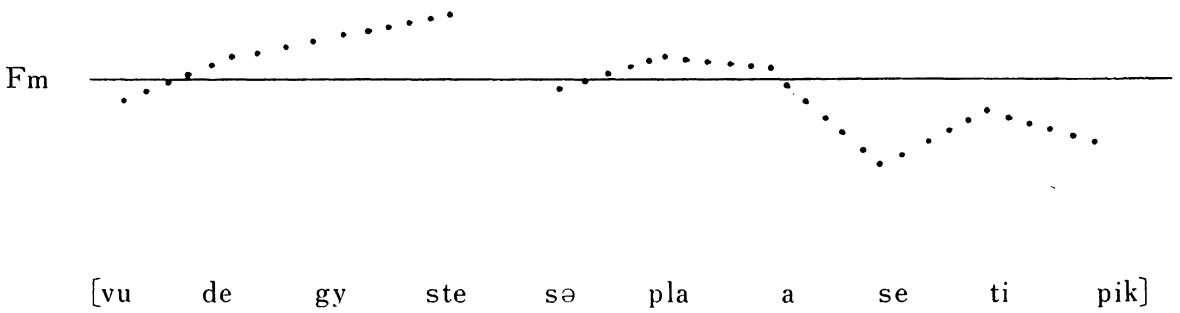
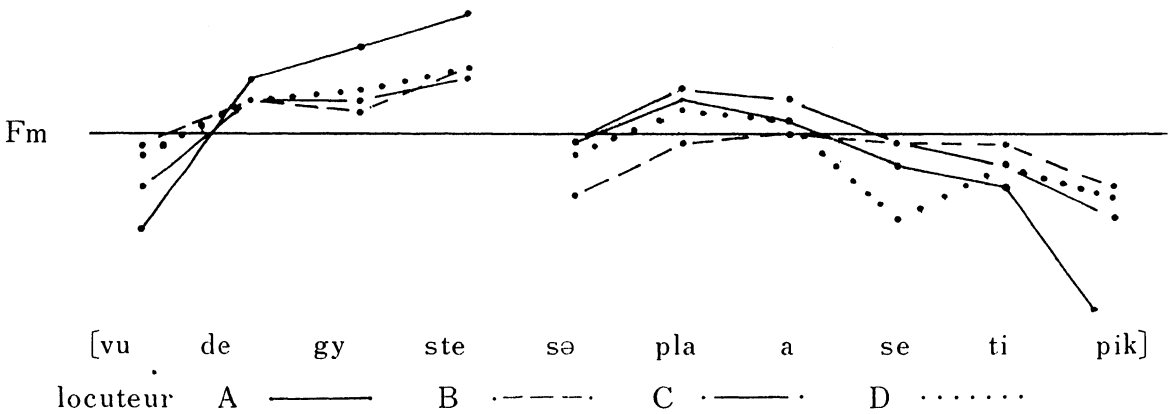


Schéma de locuteur D (Figure 4−2)

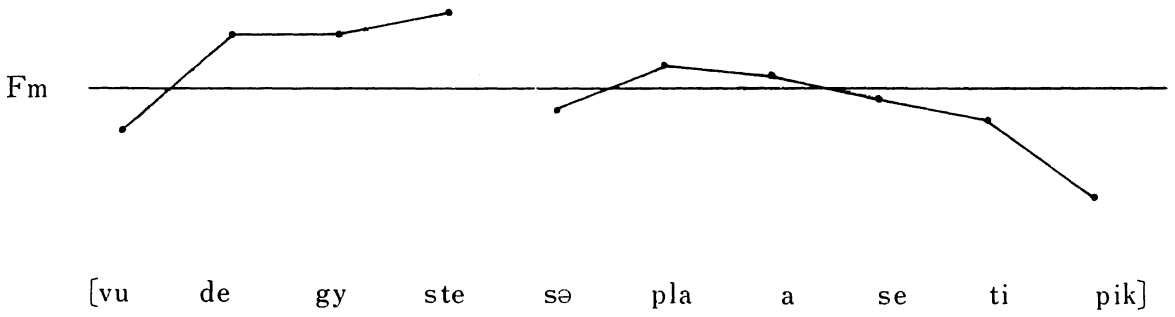


Schémas individuels superposés (Figure 4−3)



Ph 23 Vous dégustez ce plat assez typique. - schéma moyen -

(Figure 4−4)



5. イントネーション・グループについて

我々はこの仕事の分析にイントネーショングループ(groupe intonatif, 以下イント・グループ又は単にグループ) という用語を用いる。

文章の構文と関連づけた上で，イント・カーブの方向のはげしい変化がみられずに一つのグループを形成する音節群を1イント・グループとみなし線で結んだ。方向に極端な変化がみられる時はグループに切れ目があるとみなした。我々にとって大切なのは，4人の話者の発話を比較し得る状態に図式化する事にある。グループの切れ目は話し方のスピードにもより，各個人にとって違う事は充分考えられるが，後の比較分析を可能にするため，すべての話者の発話を，最も共通点の多い所で切ってある。

6. 聴覚テスト

話し言葉の研究をする際，定量的な音響分析を行うのみでは充分でない。聴覚による確かめがどうしても必要である[8]。聴覚テストは，録音された文章の肯定文としての是否を確かめる目的でフイルター法(méthode de filtrage) を用いた。即ち，録音した声を周波数が190Hz以上をカットして再生すると，イントネーションのみが聞こえ，単語の意味が聞き取れなくなる。このようにして準備したテープを，音声学の専門家にきかせ，更にパリ地方に住む15人のフランス人に聞かせ，肯定文としての判別テストを行った。我々の分析では，このテストにパスした文章しか用いていない。

7. 分析

フランス人の発話によるフランス語肯定文のイント分析に際し，定質的定量的分析の要素として次のものを重視し，これらについて分析を加える事とした。

(*i*) Attaque (文章始りの第一音節の音の高さ),

(*ii*) Sommet (文章の一番高い音の値), イントの頂点の場所は文章を構成する部分の階

層づけをするのにも大変興味深いので，その場所もしらべる事にする。

(*iii*) Fin （文章の終りの音節の高さ)。

以上の三つの値は，平均基本周波数 (Fondamental moyen) から半音単位で計算した。フランス語肯定文におけるこれらの値は，それぞれ，かなり限られた範囲に落着くと思われるので，これらを確めたい。

(*iv*) Gamme maximale （最大音階幅)

各文章について音階値の最高と最低の差をしらべた。フランス語肯定文の場合，1 octave といわれているが，それを確かめたい。

(*v*) 文章最後の音節とその一つ前の音節（＝第2尾音節）との音の差。これはフランス語肯定文最後の音節の下降イントの実際を確認するのが目的である。

(*vi*) グループ間 (特に SN と SV) の音階の差。

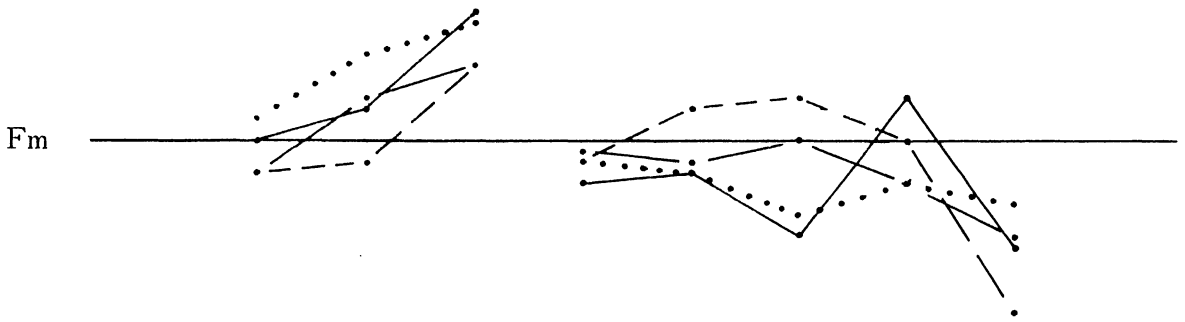
以上の6つの計測値を各文章についての個人値，各文章についての4人の平均値，各シリーズの平均値の3点から検討した。以上の分析結果はシリーズごとに表に示すこととする。

以下に各シリーズごとに分析例を示し，考察を加えたい。

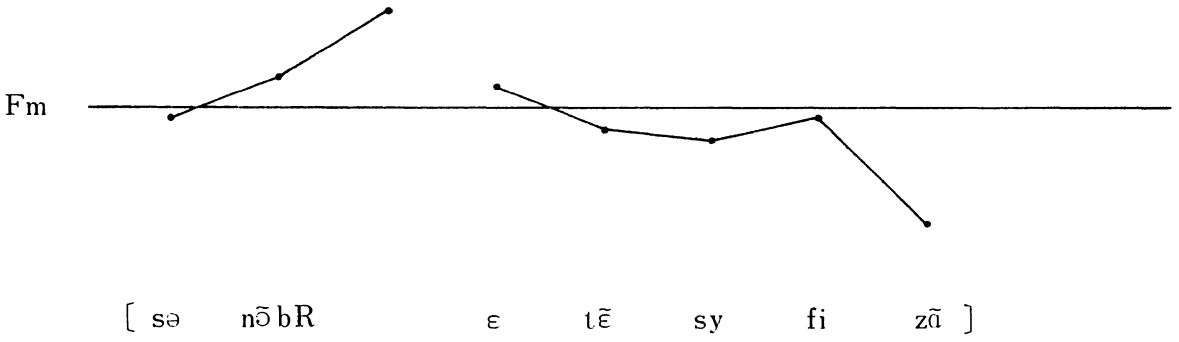
○ *Série I* の分析について

分析例1 (phrase 11)：Ce nombre est insuffisant. (Fig. 7-1-a, 7-1-b 参照)

Ph. 11 Ce nombre est insuffisant. (Figure 7-1-a)



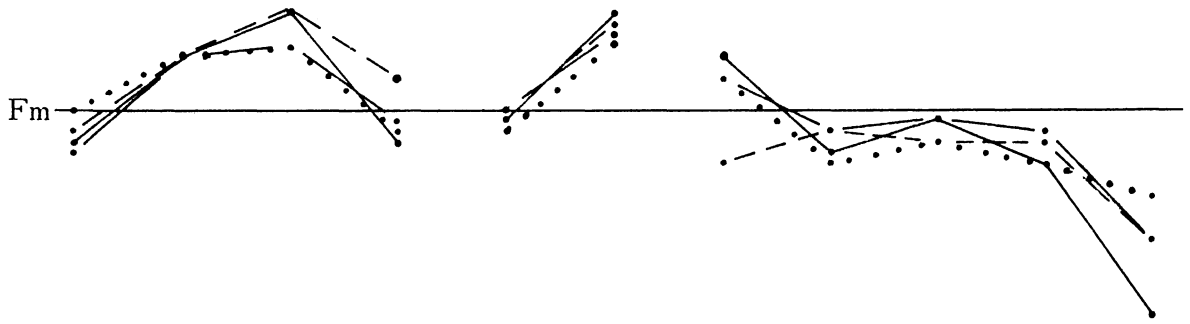
Ph. 11 Ce nombre est insuffisant. - schéma moyen - (Figure 7-1-b)



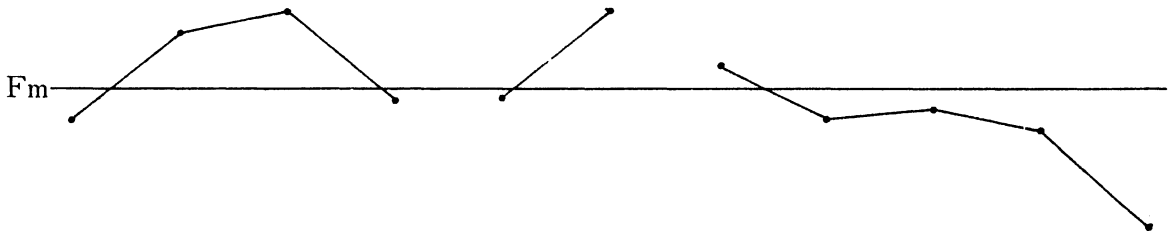
この文章は二つのイント・グループの存在がみとめられる。即ち，上昇部分 (SN) と下降部分 (SV) である。Attaque の平均は－0.5dt (＝0.5半音，平均基本周波数より下)。文章の Sommet は [nɔ̃br] の終りで＋4.5 dt (＝4.5半音，平均基本周波数より上) である。SN と SV の間の高さの差は3.4 dt. SV は下降イントであるが，第2尾音節 (個人図表では，二人の場合に第3尾音節に) 軽い上昇がみられる。最終2音節の高さの差は4.8 dt である。Gamme maximale は平均で9.9 dt である。

分析例2 (ph. 12)：Ce nombre réduit est insuffisant. (Fig. 7-2-a, 7-2-b 参照)

Ph. 12. Ce nombre réduit est insuffisant. (Figure 7-2-a)



Ph. 12. Ce nombre réduit est insuffisant. - schéma moyen - (Figure 7-2-b)



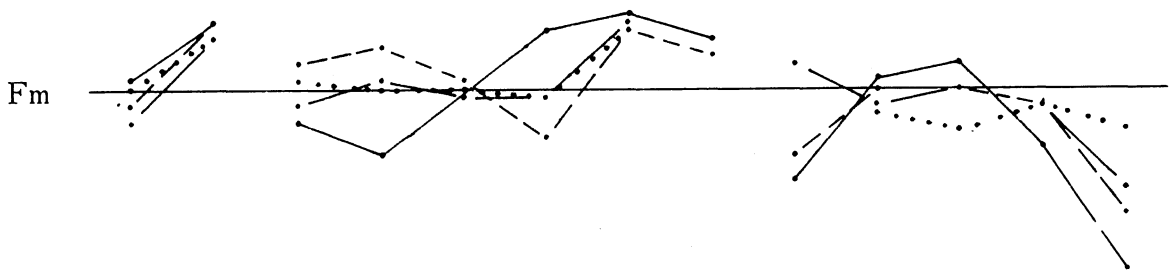
[sə nɔ̃ bRə Re dɥi ɛ tɛ̃ sy fi zɑ̃]

拡張要素，形容詞 (2音節) は，新しいグループを形成する。Attaque は－1 dt。第一グループ (Dét ＋ N) は [ə] の発音により，上昇―下降カーブとなり，それに形容詞の上昇イントが続く。(Dét ＋ N) と (Adj) のグループの間に高さの差が見られないのは注目すべき点である。イントの頂点は名詞においたのが2人，形容詞においたのが1人，両方同じ高さが1人であり，平均で名詞の方がわずかに0.1 dt 高いが，明らかな差はみとめられない。SN と SV の高さの差は2.8 dt。SV の動きは Ph. 11 と全く同じである。最終2音節の差は4.5 dt でこれも Ph. 11 と殆んど同じである。Gamme maximale は10.4 dt と Ph. 11 よりわずかに大きい。

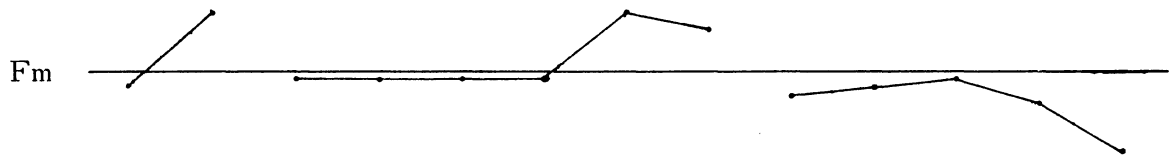
分析例3 (ph. 13)：Ce nombre assez réduit est insuffisant. (Fig. 7-3-a, 7-3-b 参照)

Ph. 12 と同様に，3つのイント・グループがみとめられる。第1グループは4.5 dt の

Ph. 13. Ce nombre assez réduit est insuffisant. (Figure 7-3-a)



Ph. 13. Ce nombre assez réduit est insuffisant. - schéma moyen - (Figure 7-3-b)

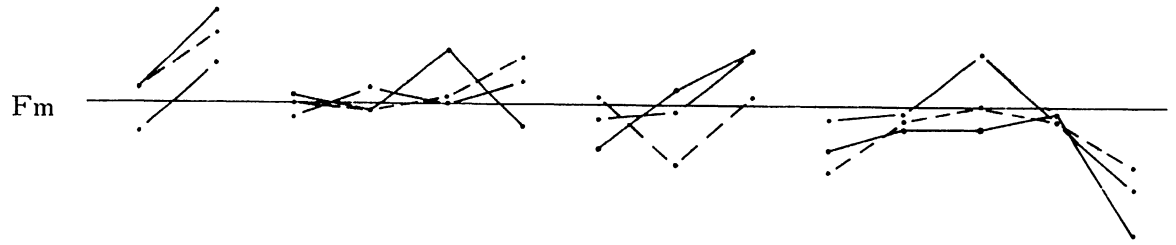


[sə nɔ̃ bRa se Re dɥi ɛ tɛ̃ sy fi zɑ̃]

上昇イントである。新しい要素 Quant は形容詞と結びつき，第2グループ（平担—上昇—下降）イントを形成する。文章の頂点はわずかの差で，名詞ではなく形容詞の方にある。第1・第2グループの間の高さの差は3.8 dt である。SV は（上昇—下降）イントが2人，前述の文章（Ph. 12）と変らず下降イントが2人であり，平均ではわずかに（上昇—下降）である。SN と SV 間の高さの差は4.2dt。最終2音節の差は 5.4 dt. Gamme maximale は10.8 dt である。

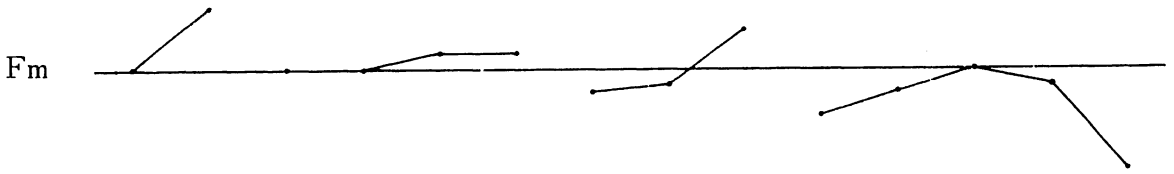
分析例4（ph. 14）: Ce nombre assez réduit de postes est insuffisant.
(Fig. 7-4-a, 7-4-b 参照)

Ph. 14. Ce nombre assez réduit de postes est insuffisant. (Figure 7-4-a)



[sə nɔ̃ bRa se Re dɥi də post ɛ tɛ̃ sy fi zɑ̃]

Ph. 14. Ce nombre assez réduit de postes est insuffisant. -schéma moyen-
(Figure 7-4-b)



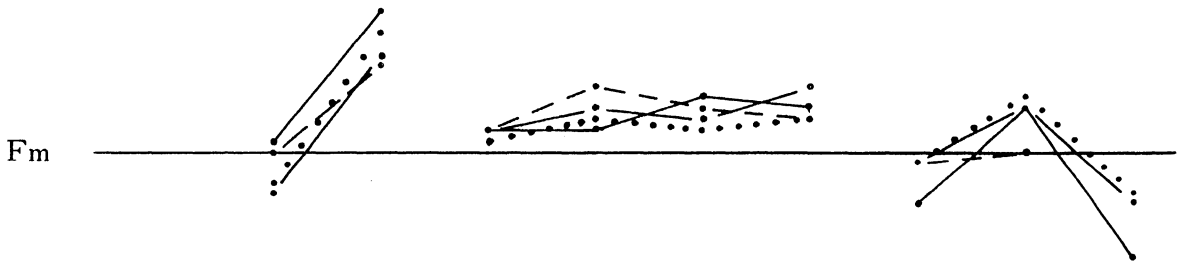
[sə nɔ̃ bRa se Re dɥi də pɔst ɛ tɛ̃ sy fi zɑ̃]

新しい拡張要素PNは1イント・グループを形成するので，グループは4つになる。

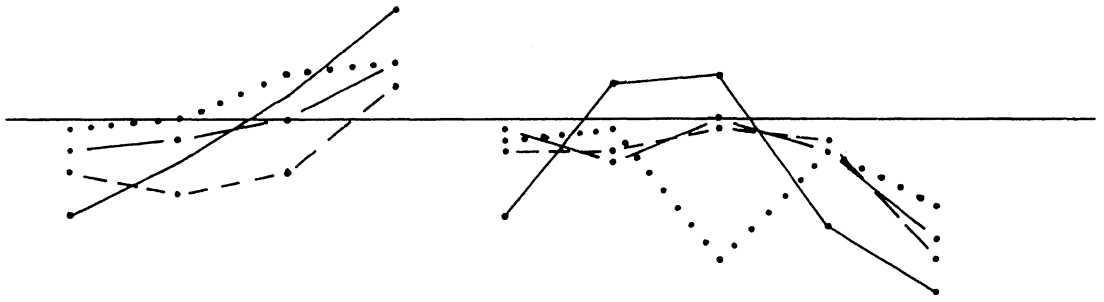
第1グループは4dtの上昇であり，3人の話者がここに頂点をおく。1話者は頂点を名詞句最後におき，posteを重要な要素としているが，他の3者にとってはPNは単なる名詞への2次的附加要素と見なされたと云える。第2イント・グループ(Quant＋Adj)はPh. 13と違い，高さが低くなり，第2の頂点は名詞句の終りにおかれる。1話者の場合は，Adjは下降イントでむしろPNと1グループを形づくる傾向にある。平均図表でも第2・第3グループ間の高さの差は2dtで第2・第3グループの結びつきの傾向がみられる。第3グループPNはSNの中で最も低い音から始まり＋2.5dtまで4dt上昇する。SNとSVの差は5.5dt。SVのイントは前の文章と同じく凸型である。第2尾音節に上昇がみられる場合が1例，第3尾音節に上昇がみられる場合が2例あった。最終2音節の差は5.2dt。Gamme maximaleは11.2dtである。

分析例5 (ph. 15)： Le nombre assez réduit de postes qu'il propose est insuffisant.
(Fig. 7-5-a, 7-5-b)

Ph. 15. Le nombre assez réduit de postes qu'il propose est insuffisant.
(Figure 7-5-a)

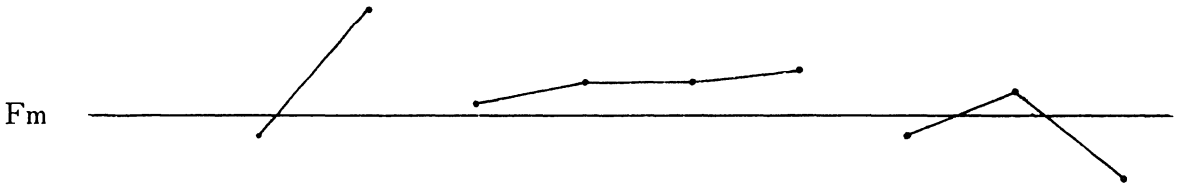


[lə nɔ̃ bRa se Re dɥi də pɔ stə

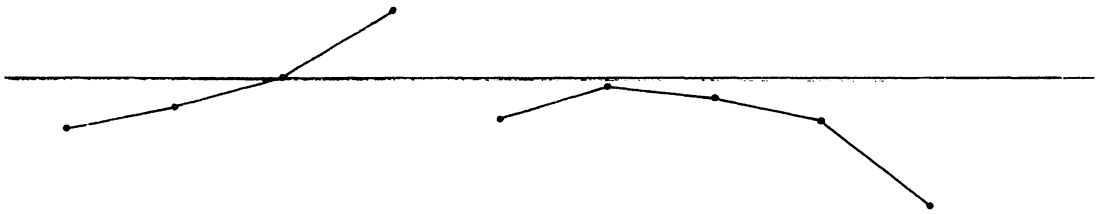


kil pRɔ pɔz ε tɛ̃ sy ti zɑ̃]

Ph. 15. Le nombre assez réduit de postes qu'il propose est insuffisant.
-schéma moyen- (Figure 7-5-b)



[lə nɔ̃ bRa se Re dɥi də pɔ stə



kil pRɔ pɔz ε tɛ̃ sy fi zɑ̃]

Ph. 15は5つのイント・グループよりなる。第一グループは−0.5 dt から＋5 dt迄上昇し，すべての話者がここに文章の頂点をおく。第2グループは殆んど平坦に Fm のやや上に発音される。Ph. 14との違いは，第3グループ PNが [ə]の発音により，上昇一下降型になる事である。SN の終り第4グループ関係節は，上昇イントであり，第2の頂点がここにある。SN と SV 間の差は4.5 dt である。SV の型は Ph. 14 と殆んど同じである。最終2音節の差は3.9 dt。Gamme maximale は11.8 dt である。このシリーズの分析結果を表にすると，次表のようになる。(Tab. 7-1) Attaque の平均は−0.6 dt で，Fm よりわずかに下である。Sommet の値の平均は＋4.3 dt。SN とSV の高さの差は4.1 dt. 最終2音節の差は4.8 dt である。Gamme maximale の平均は10.8 dt であったが，文章が長くなるにつれ，Gamme は大きく Ph. 15 では殆んど1オクターブに達っしている。(12 dt＝1 octave) 文章の頂点は殆んどの場合，第1イント・グループにおかれ，第2の頂点がSNの最後であった。

Résultat d'analyes qualitative et quantitative des indices retenus
(la moyenne)

SERIE I (Tableau 7−1) unité : demi-ton

Numéros de phrases	Attaque	Somme t (la place)	Fin	Ecart entre SN et SV	Ecart entre la pénultième et la dernière syllabe	Gamme Maximale
11	− 0.5	4.5 (Nom)	−5.5	3.4	4.8	9.9
12	− 1	3.8 (Nom)	−6.5	2.8	4.5	10.4
13	− 1	3.9 (Adj)	−7	4.2	5.4	10.8
14	0	4.2 (Nom)	−6.5	5.5	5.2	11.2
15	− 0.5	.5 (Nom)	−6	4.5	3.9	11.8
moyenne	− 0.6	4.3	−6.3	4.1	4.8	10.8

＊Ecart PD=Ecart entre la pénultième et la dernière syllabe

○ Série II の分析について

Série II の各文章についても，Série I と同様の分析が行われた。その結果をTab. 7-2, Fig. 7-6～7-10 に一括して示す。Ph. 21, 22, 23 までは，第1イント・グループ (SN_1＋SV) 上昇イント，第2グループ (SN_2) 下降イントの2つのグループの存在が見られる。上昇部分のカーブは5つの文章を通じて殆んど同じく，Attaque は Fm の下で，SV の最終音節 [te] を頂点として上昇する。Ph. 21 で，SV の最終音節の上昇が充分でないのは，2人の話者が，この文章の頂点を動詞 (Verbe = V) の始め [de] におき，文章全体を凹型イントで発音したためであり，文章の短かさからもうなずける事である。次に下降部分についてみると，Ph. 22 で形容詞の附加は SN_2 のカーブを少しかえ，N＋Adj で一つの凸型イントを形成する。更に Ph. 23 で Quant "assez" を附加しても，Ph. 22 とメロディの変化は殆んどみられない。最終2音節の差は Ph. 21 (5.5 dt), Ph. 22 (3.7 dt), Ph. 23 (3.3 dt) で，グループの音節の数の少ない方が差は大きいようである。Gamme maximale は Ph. 21 (9.7 dt) Ph. 22 (9.7 dt), Ph. 23 (8.6 dt) であり，文章の長さとGamme maximale の関係はこのシリーズでは明らかでない。Ph. 24, 25 ではイント・グループは4つになる。

Résultat d'analyes qualitative et quantitative des indices retenus

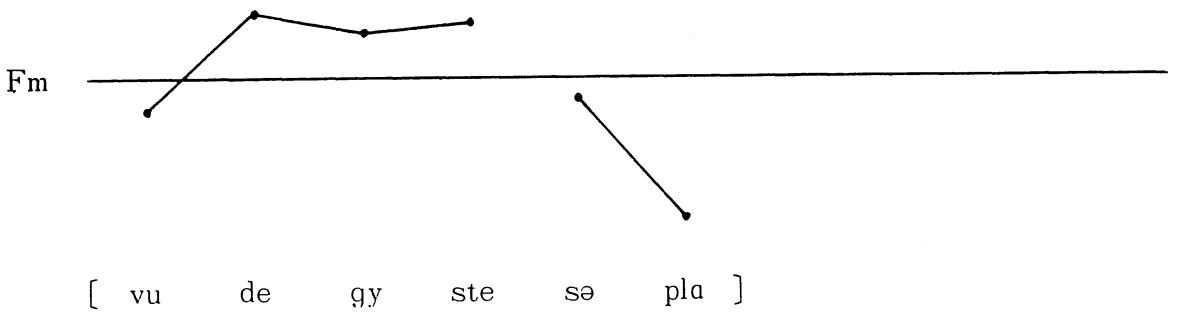
SERIE Ⅱ (Tableau 7−2) unité : demi-ton

Numéros de phrases	Attaque	Sommet (la place)	Fin	Ecart entre SN et SV	Ecart entre la pénultième et la dernière syllabe	Gamme Maximale
21	− 1.5	3 (V)	−6.5	3.5	5.5	9.7
22	− 0.1	4 (V)	−6	6.5	3.7	9.7
23	− 2	3.5 (V)	−5	4.5	3.3	8.6
24	− 0.5	4.5 (V)	−6	5.5	4	10.3
25	− 0.5	4.5 (V)	−5	3	3.8	9.6
moyenne	− 0.9	3.9	−5.7	4.6	4.1	9.6

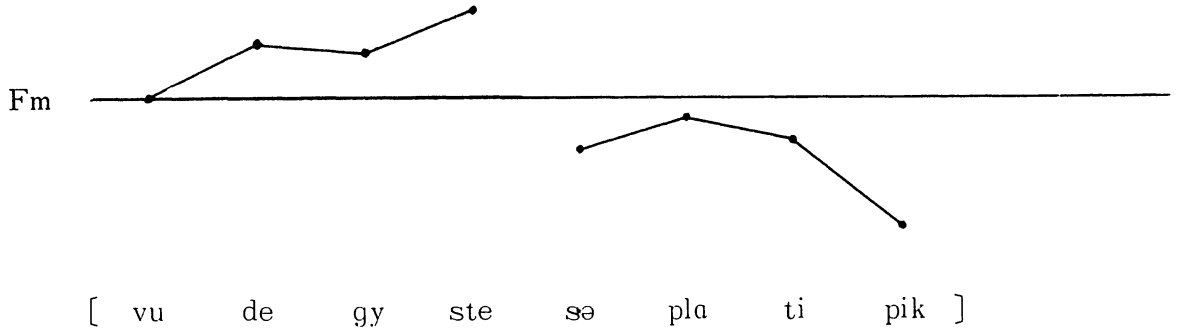
Ph. 24 での新しい要素 PN は独立して最終グループを形成する。Adj は PN の附加により，上昇イントにかわるので，平均図表では (Dét + Nom) と (Quant + Adj) は2つのグループに分かれているが，この2つのグループ間の高さの差は少なく，個人図表では，2人の話者は (Dét + Nom) の部分の上昇がなく，(Dét + Nom + Quant + Adj) で一つのグループを形成している。Nom にかなりの上昇がみられた話者は SN_2 グループで特に Nom に重要性をおき，他の要素を Nom への二次的附加要素とみなしたと考えられる。Ph. 25 では拡張要素，関係節が独立して，文章最後の下降イント・グループをなし，PN は上昇イントにかわる。この文章では Ph. 24 とちがい，すべての話者が (Dét + Nom) を平坦又は下降で発音し，(Quant + Adj) と一緒に凹型イントを示している。最終2音節の差は Ph. 24 (4 dt) Ph. 25 (3.8 dt)。Gamme maximale は Ph. 24 (10.3 dt) Ph. 25 (9.6 dt) である。

Série Ⅰ と Série Ⅱ の結果を比較してみると，Attaque, Sommet, Fin, Ecarts のそれぞれの値に1 dt 以上の大きな値はみられないが，Gamme maximale に関しては前シリーズの方が1.2 dt 大きくこれは項点と最終音節の値が，第2シリーズの方が小さい事からもうなづけるが，主語が Vous である事が理由の一つと考えられる。

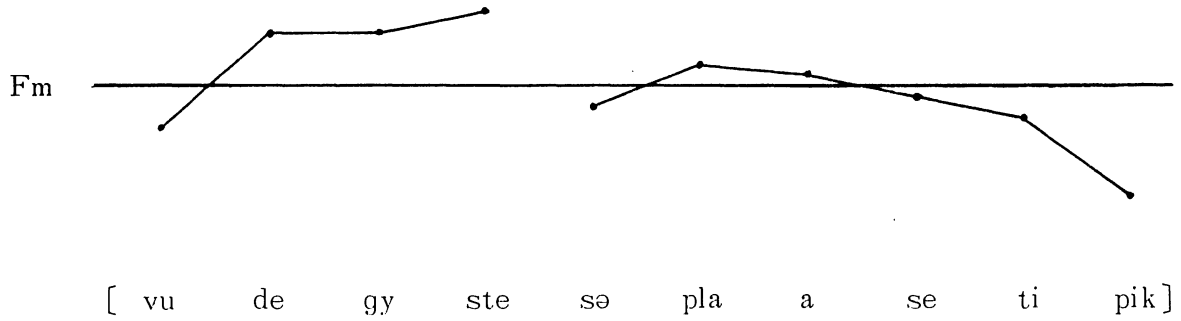
Ph. 21. Vous dégustez ce plat. -schéma moyen- (Figure 7–6)



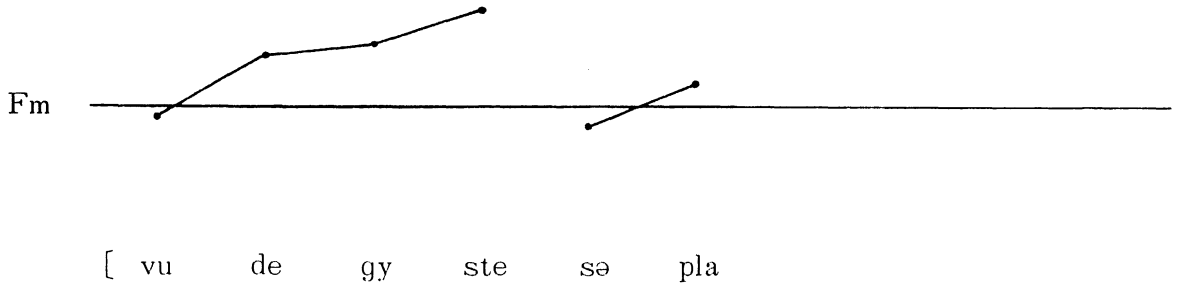
Ph. 22. Vous dégustez ce plat typique. - schéma moyen - (Figure 7–7)

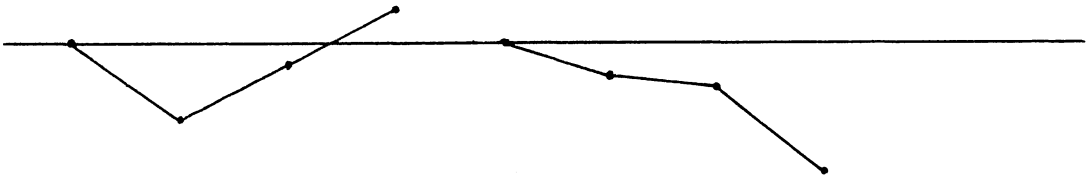


Ph. 23. Vous dégustez ce plat assez typique. - schéma moyen - (Figure 7–8)



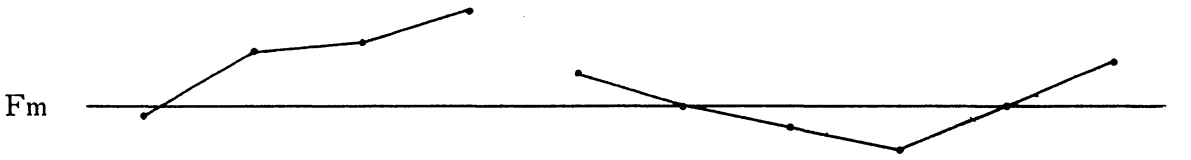
Ph. 24. Vous dégustez ce plat assez typique de la région. - schéma moyen - (Figure 7–9)



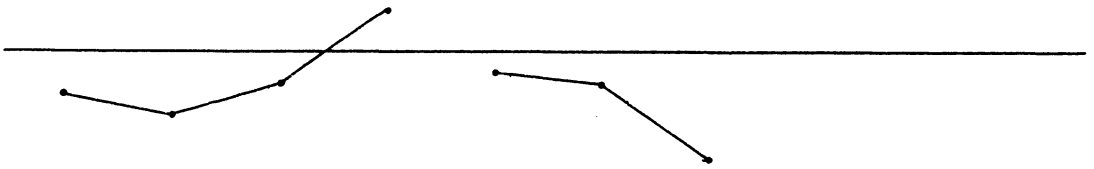


a　　se　　ti　　pik　　də　　la　　ʀe　　ʒjɔ̃]

Ph. 25. Vous dégustez ce plat assez typique de la région qu'elle propose.
- schéma moyen -　　(Figure 7−10)



[vu　　de　　gy　　ste　　lə　　pla　　a　　se　　ti　　pik



də　　la　　ʀe　　ʒjɔ̃　　kɛl　　pʀɔ　　po:z]

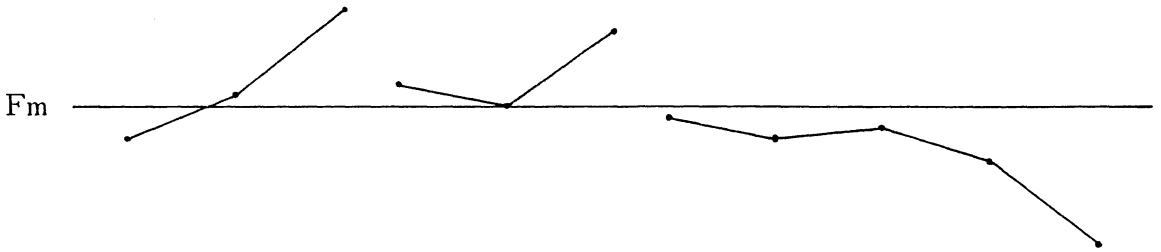
○Série Ⅲ の分析について

Série Ⅲ の分析結果を Tab. 7−3, Fig. 7−11～7−13 にまとめた。Ph. 26 は 3 イント・グループ, Ph. 27, Ph. 28 は 5 イント・グループからなっている。このシリーズではイント・グループの数も多く，文章も長いが，4 人の話者のイント・カーブの質的一致性が注目された。Ph. 26 では第 1 グループの終りがこの文章の第 1 の頂点 (＋4.6dt)，第 2 グループの終りが第 2 の頂点 (＋3 dt) である。第 3 グループ (prép.＋Dét＋Nom) は下降イントであるが，名詞の第一音節 [ma] にわずかな上昇がみられる。Ph. 27 では SN_1, SN_2 の拡張要素，形容詞は独立して1イント・グループを形成する。最終イント・グループをのぞきすべて上昇イントである。Ph. 26 では頂点は N_1 の上にあったが，この文章では形容詞の上にある。(＋3 dt)。しかし第 3 グループ (V) も殆んど同じ高さまで上昇し，第1，2，3 グループ間の高さの差は，平均ではあまり見られない。確かに個人図表でみると，1 話者は N_1 に頂点をおき，Adj は単なる二次的附加要素と見なし，他の 2 者は Adj に頂点をおき，もう一

人はVに頂点をおいているという様に個人差がみられる。Ph. 28ではSN_1とSN_2への新しい要素Quantは文章全体のメロデイを大きくかえる事なくAdjに融合されている。わずかの違いは，第2イント・グループがQuantの存在により凹型カーブになっている事である。平均図表では，文章の頂点はやはり形容詞におかれているが，個人図表では，それぞれ違いがみられた。女性話者にQuantへのアクセントをおく傾向がみられた。最終2音節の差はPh. 26, 27, 28それぞれ(36dt, 3.6dt, 4.5dt)であり，Gamme maximaleはそれぞれ(10.8dt, 9.6dt, 10.5dt)であった。

Ph. 26 Cette machine est vendue dans ce magasin.

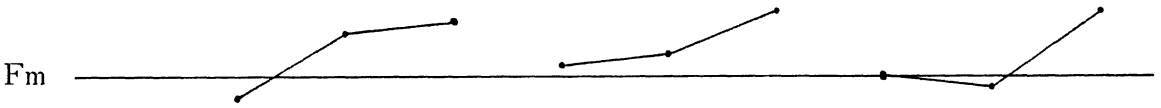
(Fig. 7−11) Schéma moyen



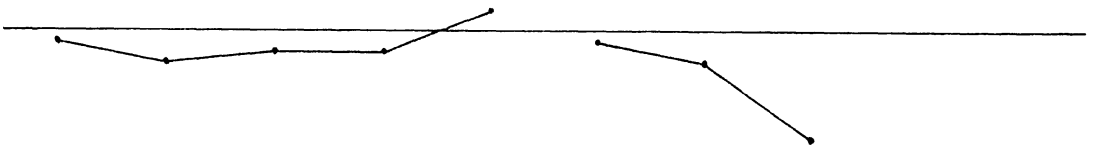
〔sɛt ma ʃin ɛ vɑ̃ dy dɑ̃ sə ma ga zɛ̃〕

Ph. 27 Cette machine moderne est vendue dans un magasin renommé.

(Fig. 7−12) Schéma moyen

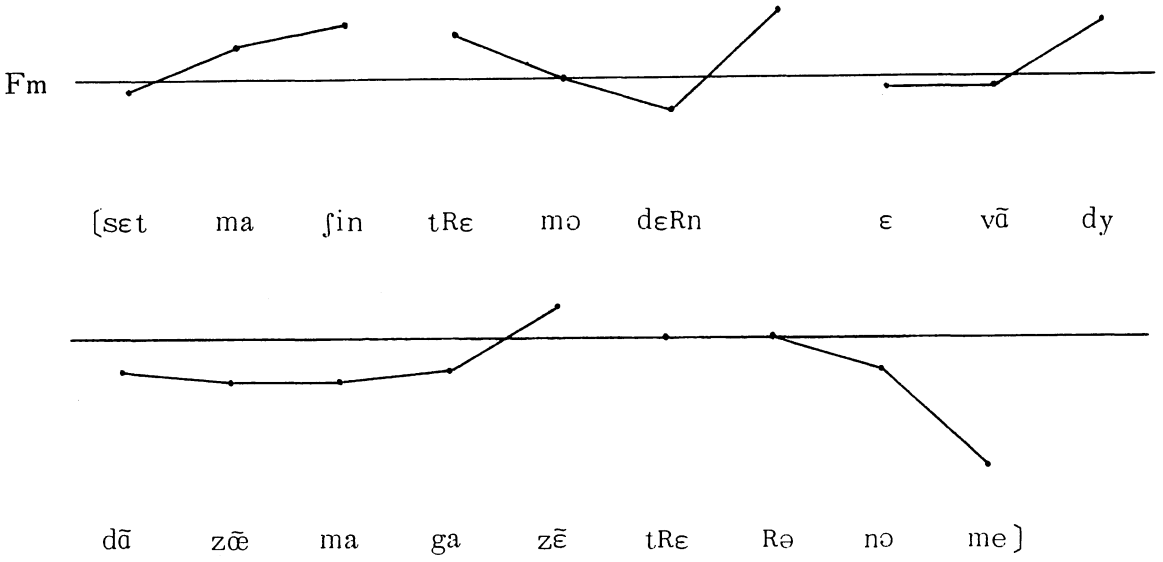


〔sɛt ma ʃin mɔ dɛRn ɛ vɑ̃ dy



dɑ̃ zœ̃ ma ga zɛ̃ Rə nɔ me〕

Ph. 28 Cette machine très moderne est vendue dans un magasin très renommé. (Fig. 7−13) Schéma moyen



Résultat d'analyse qualitative et quantitative des indices retenus

SERIE Ⅲ (Tableau 7−3) unité : demi-ton

Numéros de phrases	Attaque	Sommet (la place)	Fin	Ecart entre SN et SV	Ecart entre la pénultième et la dernière syllabe	Gamme maximale
26	− 1.5	4.6 (N_1)	−6.6	3.5	3.6	10.8
27	− 1	3 (Adj_1)	−5	3	3.6	9.6
28	− 0.5	3 (Adj_1)	−6.5	4	4.5	10.5
moyenne	− 1	3.5	−6	3.5	4	10.3

まとめとかんがえ

我々は，拡張を含む名詞句に焦点をあて，肯定文のイントネーション分析に大切と思われる諸点について，フランス人話者の共通性をつかむため，定質的・定量的分析を行った。Série Ⅰ，Ⅱ，Ⅲを通じて，次のような事が云える。

—Attaqueはどの場合もFmよりひくく，平均で−0.6dtから−1dtである。

—Sommetの値はFmより3.5～4.3dt上であり，頂点の値の一番高いのはSérie Ⅰ（名詞句が主語の位置にある場合）である。

—Sommetの位置は，名詞句が主語の位置にある場合（Série Ⅰ）では第1イント・グループNomに一番多く，次が名詞句の終りであったが，名詞句が目的語の位置に来た場合（Série Ⅱでは）は，SV（第1イント・グループ）に第1の頂点，第2の頂点はSN_2のAdj又はSN_2のAdjとPNの2個所であった。Série Ⅲでは，頂点が明らかに第1イント・グループにあるのはPh.26だけであり，他の文章では個人差が見られた。

—SNとSVの間の高さの差は3.5～4.6dtの間である。名詞句が目的語の位置にある場合（Série Ⅱ）の値が一番大きかった。

—文章の最終2音節の差は4～4.8dtであり，Série Ⅰの場合が一番大きかった。

—Gamme maximaleは9.6～10.8dtであり，1オクターブよりは少し小さい。

—文章のイント・グループの数は最大5つであった。

イントネーション研究の問題の一つとして，分析のもとになる文章の準備に関する問題がある。現在その傾向は大きく二つに分けられる。その一つはラジオからの録音や，スタジオで聞手の質問に答える形での（le jeu des questions binaires）[9]自然発音といわれるもの，もう一つは，限定された構文にもとづき作成した文章をスタジオで話者にいわせるもので，構文とイントネーションの関係を研究しようとする者は殆んどこの方法を用いており，[10]フランス語肯定文のいくつかの構文とイントネーションの働きを調べようという我々の目的にはこの方法が適していると考えた。この方法の利点は，文章が準備されているので，話し言葉に附ずいして表われる特徴で，我々の目的にかなわないものを取りのぞく工夫ができる事である。即ち，ためらい，とぎれ，くりかえし，個人的くせ，又は感情表現等である。欠点といえば，文章にふさわしい状況が欠けていると，不自然な発話の色合いをおびる事で，それをさけるために充分考慮がなされるべきである。

一般に構文の切れ目は音声面の切れ目と一致する事が云われている。一つの文のイントネーションを構成する部分を定義づけるため，専門家達はしばしば違った用語を用いて来た。[11] Fouchéはgroupe rythmiqueという用語を用いているが，その定義はGrammont, Malmbergにも共通するものである。ごく最近は音響，聴覚分析技術の発達に伴い，groupe prosodiqueという用語が用いられるようになった。我々の用いたgroupe intonatifは，平均基本周波数を分析のもとにしており，速さ，強さ等の要素は標準化している。グループの切り方に個人差の見られる場合は分析に際して注意した。

我々はこの仕事でしらべた諸点について，後に同じ方法を用いて，日本人発話との違いをしらべる予定である。

フランス語肯定文のイントネーションについては，今回は名詞句に焦点をあてたが，更に，話し言葉でよく表われるもので，文法要素の欠けた文章（動詞なしの文章）や，フラ

ンス語文法で一般に認められる語順にかなわない文章等でのイントネーションの働きをしらべる予定である。

(この仕事はパリ大学Ⅲ音声研究所のグゼル教授の指導のもとで行われた。教授の御指導に心から感謝します。)

注

1) J. et G. Capelle, *La France en Direct*, Hachette
C'est le printemps, CLE international
M. Callamand, *L'intonation expressive*, Paris Hachette/Larousse, 1973
G. Faure / A. Di Cristo, *Le français par le dialogue*, Collection Outils, Hachette, 1977

2) 阿南婦美代，フランス語上昇調疑問文を発する際，日本人話者にみられたイントネーション干渉現象について。フランス文学論集，1978，九州フランス文学会, pp. 25−44

3) M. Salkoff, *Une grammaire en chaîne du français, Analyse distributionnelle*, Dunod, Paris, 1977, p 78

4) Institut d'étude linguistiques et phonétiques, 19, rue des Bernardins, 75005, Paris

5) JC Lafon et Guichard, *Procédés pour mesurer les résultats de thérapeutique de la voix, de la parole et du langage*, Folia Phonética, 1971, 23, p 111

6) 音階と基本周波数との換算は次の公式に従った。
$YHz = Réf\,Hz \times N \times 24\sqrt{2}$
(Réf Hz = 65.4 Hz,　N = nombre de quart de ton　$24\sqrt{2} = 1,0293$)

7) Rossi et Chafcouloff, Recherches sur le seuil différentiel de fréquence fondamentale dans la parole, *Travaux de l'Institut de Phonétique d'Aix-en-provence*, vol. 1, 1972, p 179−194

8) B. Malmberg, Analyse instrumentale et structurale des faits d'accent, *Proceed. of the IV Int. Cong. of Phonetic Science*, Helsinki, 1961, Mouton la Hage

9) I. Fonagy & Berard: Questions totales simples et implicative en français parisien, Interrogation et intonation, *Studia Phonética* 8, Didier, 1973 pp 53−97

10) A. Di Cristo, J. Vaissière, P. Martin (voir bibliographie)

11) Fouché définit *le groupe rythmique* comme étant caractérisé au point de vue phonétique "par une suite de syllabes inaccentuées terminée par une syllabe accentuée." A. Di Cristo définit *le groupe prosodique* "comme une unité supra-ségmentale, délimitée par une variation perceptuelle significative, d'un ou de plusieurs paramètres prosodiques."

BIBLIOGRAPHIE

1. BALLY Charles, *Traité de stylistique française*, Volume I, II, 1951, Klincksieck, Paris
2. CHEVALIER, J. C., BLANCHE-BENVENISTE, C., ARRIVE, M. et PEYTARD, J, *Grammaire du Français Contemporain*, Larousse, Paris
3. Di CRISTO, Recherches sur la structuration prosodique de la phrase française, *Actes des 6èmes Journées d'Etude sur la Parole*, G. A. L. F., vol. 1 pp 95-116
4. Di CRISTO, Des traits acoustiques aux indices perceptuels. Application d'un modèle d'analyse prosodique à l'étude du vocatif en français, *Travaux de l'Institut de Phonétique d'Aix*, vol 3, 1976, pp 213-358
5. Di CRISTO et ROSSI, M., Propositions sur un modèle d'analyse de l'intonation, *Actes des 8èmes journées d'étude sur la parole*, G. A. L. F., Aix-en-Provence, 1977
6. DANES F., Sentence Intonation from a functional point of View, *Word* 16, 1960, pp 34-54
7. DELATTRE, De la hiérarchie des indices acoustiques pour la perception de la parole, *Proceedings of the Fifth International Congress of Phonetic Sciences*, Mûnster 1964, pp 245-251
8. DELETTRE, P., Les dix intonations de base du français, *French Review*, 40(1) 1966, pp 1-14
9. DUBOIS, J, et DUBOIS-CHARLIER, F., *Eléments de Linguistique Française* : Syntaxe, Larousse, Paris, 1970
10. FAURE, G., Aspects et fonctions linguistiques des variations mélodiques dans la chaine parlée, *Proceedings of the 9th international congress of Linguists*, Cambridge, August 1962, Mouton, The Hague, pp 72-78
11. FAURE, G., Contribution à l'étude de la fonction prédicative de l'intonation,

Travaux de l'Institut de Phonétique d'Aix, volume 1, 1972, pp 3-11

12. FOUCHE P., *Annales de l'Université de Paris*, Novembre-Décembre, 1934, p 520
13. GRAMMONT M., *La prononciation française*, Delagrave, Paris, 1966
14. GROSS, M., Sur la place de l'intonation dans une grammaire transformationnelle, Laboratoire d'Automatique Documentaire et Linguistique, Universités Paris 8 et Paris 7
15. GRUTTENDEN, On the So-called Grammatical Function of Intonation, *Phonetica* 21, 1970, pp 182-192
16. HAZAEL-MASSIEUX, Pour une détermination des fonctions grammaticales de l'intonation, Analyse de quelques tests d'encodage et de decodage, *8ème journées d'étude sur la parole*, Aix-en-Provence, 1977, pp 289-295
17. KARCEVSKIJ, S, Sur la phonologie de la phrase, *Travaux du cercle Linguistique de Prague* 4, pp 188-277, reprinted in : VACHEK, J., ed.
18. LEON, P. et MARTIN, P, Prolégomènes à l'étude des Structures Intonatives, *Studia Phonética*, 2, Didier, 1970
19. MALMBERG B., *Manuel de phonétique générale*, Collection connaissance des langues Editions Picard, 1974, p 36.
20. MARTIN, P., Les problèmes de l'intonation : Recherches et méthode, *Langue Française* 19, 1973, pp 4-32
21. MARTIN, P., Problèmes de neutralisation des marques prosodiques, Application à la reconnaissance automatique, *Actes des 8èmes journées d'étude sur la parole*, Aix-en-Provence, 1977, pp 305-311.
22. ROSSI, M., Le seuil de glissando ou seuil de perception des variations tonales pour les sons de la parole, *Phonetica* No 23, 1971, pp 1-33
23. ROSSI, M., Intonation prédicative dans les phrases transformées par permutation, *Linguistics*, 103, 1973, pp 64-94
24. VAISSIERE, J., Caractérisation des variations de la fréquence du fondamental dans les phrases françaises, *6ème journées d'étude sur la Parole*, vol. 1 1975, pp 39-50
25. VAISSIERE, J., *Fréquence fondamentale des phrases déclaratives en français*, Institut de technologie du Massachussetts, Cambridge, USA.
26. VAISSIERE, J., Quelques expériences d'analyse perceptuelle en français, *8ème journées d'étude sur la parole*, G. A. L. F. Aix-en-Provence, 1977, pp 183-189

27. WAGNER, R. L. et PINCHON, J., *Grammaire du Français Classique et Moderne*, Hachette. 1962

(旧姓亀井. F.37 長崎外国語短期大学非常勤講師)